

残された人生、生きてきた道を思い出しながら 楽しいことを見つけて前を見て行きます

神戸(ゆうゆうの里) 矢葺好子様(82歳)
令和2年12月 一人入居

私も主人も4人きょうだい

兵庫県の相生生まれです。4人きょうだいの末っ子。長男の兄とは16歳年齢が離れていたのですが、子供の頃は兄嫁が私をすごく可愛がってくれました。兄嫁と一緒によく料理をしました。主人は4人兄弟で長男。結婚してから主人の現役時代は、仕事の関係で9回の引っ越しをして、色々な地方の食べ物を知りました。主人の実家とは離れていても、姑に対する嫁の気遣いが求められました。私も仕事を休んでいましたが、12月30日から絶対に休むという条件で

採用してもらい、毎年29日の夜には主人の実家に帰り、二日間おせち作りに励みました。主人の弟たち家族も集まると一族20人となります。舅が私のつくったなますを誉めたら姑は食べずに無視とか、今なら笑って話せます。主人が定年になると、私たちは、和歌山にある主人の実家に帰り、姑も同居の生活が始まりました。

和歌山で姑との同居が始まってからも、楽しい思い出はあります

主人のおかげで、実家でも楽しく過ごすことができました。主人が退職してからの10年間は、とにかく二人で沢山旅行をしました。主人は優しい人です。ある時、主人が旅先で、すごく素敵なコーヒーカップを見つけてきました。私の大好きな紫陽花柄のカップです。とても高価なので、旅行中のふところ具合が心配だったけど、どうしても持って帰りたかったと聞きました。それから古い着物をリメイクする先生に出会いました。和歌山で

も先生のお教室が開講されることになって10年以上通いました。教室では年に一回、生徒による作品展を高島屋や梅田阪急で開催します。自分で作った服を着て自分がモデルになるのはすごく楽しかった。ドイツでのファッションショーにも参加し、留めそでからツーピースを仕立てました。百貨店では作品を販売できるので、毎回6〜7点くらい出品しては完売しました。着物の生地の良い付けも友人達と一緒に出掛け、半分ずつ分けるのも楽しみでした。そんな関係が20年続いた友人とは今でも交流があります。手芸が好きで里でも趣味のパッチワークを再開しました。

主人は最後まで優しい姿を見せてくれました

定年から10年もした頃、主人は心臓を患い手術をしました。手術から10年ちよつとしたある日一緒に夕食を食べて、それぞれに就寝。私が午前二時頃見に行くと、主人は良く寝ていました。しかし朝になって、お茶を持って主人に声をかけた時には動きませんでした。いつもの寝ているポーズのまま、ちよつと声を掛けたらそのまま起きそうな安らかな表情でした。主人は自身の死に際しても私を怖がらせない姿で逝ったのだと思えました。実は、同居してから姑がお風呂で亡くなり、主人と私が第一



パッチワークの作品と

入居以来生活のリズムを整えて、今では、脊柱管狭窄症が改善しよく歩けるようになりました

和歌山には自立入居型のホームがなく、ホームの合同説明会に参加して探しました。安心のためには、毎月の費用が年金の範囲であること。そして農園がある神戸に決めました。

毎日のリズムは、まず朝はラジオ体操。夏は毎日、午前の農園へ。冬は毎日ではなく12時頃に野菜の手入れに行きます。ウォーキングは1日4000歩ほど。持病の脊柱管狭窄症が改善したからです。入居してから診療所に紹介していただいた病院のおかげです。



ありし日のご主人と伊豆旅行の思い出